

爲君幾下蒼龍窟

きみ ため いく くだ そうりゅう くつ
君が爲 幾たびか下る蒼龍の窟
(『碧巖録』)



十月になりました。残暑も一段落。豊かな
稔りの秋、本番でございます。さて、今回の禅語です。

君がため、幾たびか下る蒼龍の窟

深山幽谷の奥の奥、黒々と静かに水を湛える湖の底に、人知れず
静かに棲まう龍...

龍は、何百年、何千年もの悠久の時の流れの中で、その身に苔を
纏い、不気味な蒼黒い姿をしています。そしてこの龍は、世にも貴重
な「宝珠」つまり「宝の玉」を頤の下に守っているといます。

「君がため...」という時の「君」とは、この宝の玉、「宝珠」のことで
す。

艱難に耐え、辛苦を重ねながら、人跡の稀な深山に分け入り、山の
主とでも言うべき蒼龍の湖を探し当て、宝珠(宝の玉)を奪い獲って
くる...その宝珠を得るためならば、どれほど危険が身に迫ろうとも、
何度でも何度でも、龍の住処へと降りていく...

それでは、それほどまでして得ようと努める「宝珠」、宝の玉とは、いつ
たい何なのか...

それは世界にたった一つ...過去から現在を経て、未来に至るまで、
宇宙の隅々までくまなく探しても、たった一つしかないもの...わたした
ちのいのちであり、わたしたち自身であり、わたしたちの人生です。

わたしたちの一生は儚く短い...しかし、だからこそ、それが一度きりで
あることを実感することができる。誰のいのちも例外なく、儚く失われて
いく...だからこそ、過ぎ去ってしまったならば、二度と帰ってはこない、
その尊さがきわだつのです。

美しく、醜く、^{とうと}貴く、^{いやし}卑しく... 喜びに溢れ、悲しみに満ち、楽しく、しかも苦しい... そして、だからこそ、愛おしいもの... 自分の人生と、自分自身、それが、「君がため...」と呼ばれている宝の玉、宝珠です。

そして宝珠、わたしたちの人生、わたしたちのいのちそのものを、わがものとするためには、まず、すべてを捨てて、一人で地図のない山の中に入っていかなくてはなりません。本当の意味において、自分自身であるために、わたしたちはまず、^す手探りで歩き始めるのです...

そして、やっとの思いで龍の棲む湖を見つけ出したとき、いよいよ本当の意味での挑戦が始まるのです。^{すみか}つまり、龍の住処を見つけたならば、^{いのちが}どれほど危険が多かるうとも、命懸けで、龍が棲む洞窟の底へと降りていかなくてはならないのです。

^{あご}龍が頤の下に護っている宝珠を奪い獲るというのは、命懸けの行為です。その命懸けの行為を、何度も何度も、繰り返し行う...

しかし、ここで「命懸け」と言うとき、それは何も危険な行をする、という意味ではありません。そうではなく、自分の人生をそれに賭ける、ということです。

それを成し遂げるためであれば、自分の人生を差しだしても良い... たとえ、その実現の途中で自分の人生が終わったとしても、構わない... 損得はもちろん、成功失敗、実現可能、不可能とを問わず、ただ、なすべきだからなす... なさねばならぬから、なす...

誰もが、まず初めに、そのためならば人生を賭けることができる何か... 「宝珠」を見つけなくてはならないのです。そしてそれは、実は人生の課題そのものなのです。そのために生き、そのために死ねるようなもの、そうしたものを、わたしたちは使命、^{あご}と言い、目的と言います。

そして、宝珠が見いだせたならば、あとは勇気を奮い起こして、ただ進めば良いのです。そうであるからこそ、この宝珠が見いだされるまでは、粘り強く待たなくてはならないのです。それもまた、大切な修業なのです。

